

ヨーロッパ文化文明像Ⅳ

古川 氏 幸*

A Portrait of European Culture and Civilization IV

Ujiyuki FURUKAWA

目 次

(F) フランス

1. 栄光のパリ
2. ヴェルサイユ
3. ソルボンヌ大学
4. UNESCO 本部
5. 名所雑感
6. パリの美術館・博物館
7. ロワール河流域と古城群

1. 栄光のパリ

優雅なたたずまい、華麗な装美に包まれて世界に現存するもっとも美しい町と云われるパリの全貌、パリ人は自然を征服しようとし、土を否定し石の町をつくりあげた。贅を尽した人工的美で囲まれた石の文化、壮麗な石造建築物の底に浸みこんだ遙かなる陰影に霞むパリ。ヨーロッパの芸術と文化と政治と宗教と、他面底知れぬ支配者達の繰り広げた豪華絢爛たる権威性と、それを反発して下からもり上る相次ぐ逞しい力、葛藤する力と力との内に外に激突し重層するところ、今日もなお古きものと新しいもの

の微妙に混交して相対する異質要素の入り混った華麗な歴史をくり展げるパリ、ここを人は花の都と呼ぶ。栄光高き18世紀の往年の姿は今もなお万人の眼に浮かぶ、華かなりし当時を偲んでヴェルサイユに、ルーヴルに、凱旋門に、或いはセーヌの流れにその影を浮べるノートルダム远景の陽光に映える美しさを称える言葉であろうか。それとも繁華なシャンゼリーゼの町並を歩いて、大通りを包む店頭の高価な装身具や調度品を称えての言葉であろうか。だが、筆者には軽々しく花の都の言葉は出てこない。パリこそヨーロッパそのものの陰影のかげりを宿した巨大な都としか映らない。ローマの偉大さは遙かなる過去の文化文明の遺産であったが、18世紀のパリの姿は、今もなお人々はその石の家屋の中に住み、未来に向っても複雑な様相で生きつづけている町、古き文化像と新しい未来図とが不思議に混在し葛藤をつづける都である。過去の栄光を永遠に秘めて、パリには表と裏と、明るさと暗さと、繁栄と雑踏と、二つの顔をもって複雑なヨーロッパの歴史を代表する都市である。パリこそヨーロッパの運勢そのものの象徴であろうか。

ロンドンの如くどっしりと動かない厚重さとはまた異なり、豪壮ではあるがやはり華麗な外装華かな石の文化が過去の栄光を永遠に秘めた都がパリである。

* 社会系一政治学 (Department of Liberal Arts and Science—Politics, Doctor of Law)

シーザーのガリア戦記によれば、ローマの軍隊がシテ島に砦を築いたのが町のはじまりと云う。実に2,000年前にセーヌ河の中の小さな小島は総てが要塞であった。今もローマ時代の遺跡としての浴場の跡も残っている。この小さな島シテ島がパリの始まりであり、王朝文化最初の砦はここにできた。イギリスとの百年戦争の後に宮殿はセーヌの北岸のルーヴルへ移った。ルイ14世の時代になって大貴族達によるブルボン王朝の専制を抑える目的で起したフロンドの乱を避けて、宮殿生活は一時パリからヴェルサイユへと移された。かってシテ島を威圧したコンシエルジュリー王城は革命後王党一族の牢獄と化し、現在は役所に変った。旧ブルボン宮は今国会議事堂としてマドレーヌ寺院の真正面に残っている。ありし日のブルボン王朝の権威性は、残存するあらゆる建造物にその面影を宿している。

パリの発達には、シテ島を中心にその北と南に分れてセーヌ河の両岸にはじまる。シテ島にはノートルダム寺院も、サン・シャペル聖堂も、フランス最高裁の建物も、コンシエルジュリーも、この小さな島にあふれ出る程ぎっしりと林立して建っている。

湾曲したセーヌの河の南側には、西から数えてエッフェル塔、ナポレオンの墓アンバリッド、国連の教育・科学・文化を司るユネスコの本部、ヨーロッパの大学の始まりとも云うべきソルボンヌ大学、しっとりと落ち着いたリュクサンブール公園、セーヌ河の北側には先ず河岸にぴたりと沿ってルーヴル博物館(旧王宮)、この北岸には河の流れる方向に向って真直ぐに東南から西北へと続くシャンゼリゼ大通りが、エトワール広場の凱旋門を基点としてコンコルド広場まで延びている。その長さは1,880m、幅は100m、このいとも賑やかな大通りを中心に、周辺一帯に展開するこれらの見事な建造物の内外を参観するのが、パリを訪れる世界の人々の憧れでもあろう。

エトワール広場の中央に建つ凱旋門を基軸にして、12本の放射線をなした大道路がパリ全市

へ延び、各道路のつき当りには数々の著名な建造物が並ぶ。パリ市街を道路網から眺めれば、市の中心は凱旋門でここから12本の放射線状の道路が走る。だがパリの交通網は殆ど縦横無尽に、完備した地下鉄がセーヌ河の地下を自由自在に通過するので、その地点からたちまち何処へでも行ける。地下鉄の中では、常に今の自分の走っている場所は頭上を流れるセーヌ河の南か北かを判断しつつ、今いる地点の確認を続けていると乗り換え地点が判らなくなる程複雑な地下交通網で連結されている。その人の目的と好みによって、パリの中心は発祥の地シテ島と見ても良く、コンコルド広場やルーヴルを主体に考えてもよく、シャンゼリゼ大通りを心臓部と観察することもよい。筆者にとっての中心地はエッフェル塔を背にして東南へ、ナポレオンの遺骸の寝るアンバリッドの近くにあるユネスコの本部を訪れることである。だが史的精神的にはパリの中心地はノートルダム大聖堂である。

パリには地形的にも、歴史的にも、文化的にも、中心と考えたくなる重要な石の建造物が無数に散在し、とくに地下鉄が便利となった現在、パリ全体が周辺諸都市を一括してフランスの中心と判断するのが良い。コンコルド広場の八角形をなす各の隅には、フランスを代表する八つの都市リヨン、マルセイユ、ボルドー、ナント、ブレスト、ルーアン、リール、ストラスブールの方向に向って八名の女神像が立っている。栄光高きパリとは実にヨーロッパ大陸総てを支配した心臓部であったということである。

何人もパリに一步を印すれば美術・文学は別として、先ず誰の眼にも圧巻として迫るものは18世紀のブルボン王朝の豪華絢爛たる文化の遺産であり、フランス大革命とそこに起った色々の余波であり、更にナポレオン一世の偉業という三つに絞られる。その間に所々に瞥見する救国の女乙ジャンヌダルクの姿や、あたりに漂う画家や文豪達の面影である。そしてひたひたと忍び寄る先人の残した文明の潮である。コンコルド広場に立てば、ブルボン王朝とフラン

ス革命というかつての歴史に見ることの無かった突如として起った余りにも大きな事件の足跡が、今日もおお歴然として全パリの蓋いつくしている。筆者の胸中にはどうしても花のパリのイメージではなく、陰影濃い古い石の文化である。自然を征服し土を嫌った近代ヨーロッパの姿である。

王朝文化を代表する太陽王ルイ14世は僅か40才で王位につき、その在位は77年、その間ヴェルサイユ宮殿の造営に30余年の才月を費し、36,000人の職人と6,000頭の馬を使用した工事の費用は蔵相コルベールをも慨嘆させた。ナポレオンは一士官から身をおこし、35才で皇帝となり、欧州全土を席捲したが52才で雄図空しくセントヘレナで歿した。1821年5月5日であった。彼の遺骸はセントヘレナから六重の棺に収められ、四頭立の柩車で1840年11月母国へ帰った。イギリスは鄭重に遺骸をフランスへ届けた。凱旋門をくぐって慣れたセーヌの畔アンバリッドの地下ヘルイ・フィリップによっておさめられた。ここはかつての仏軍の司令部のあった所、その建物は廃兵院である。

フランス大革命は起こるべくして起こり、温厚な君主ルイ16世は生と死を決める大衆の投票が僅か一票の差で断頭台の露と消えた。一大激変期18世紀の総てがパリに凝集し、王朝文化に色どられた権力の座に結ばれたヨーロッパ近代国家の縮図が即ちパリである。ブルボン王朝の驚くべき贅を尽した豪華な文化の遺産は、次第に復元されつつ往時の宮廷生活の真相を語るもの。人々の云う花の都とは、この華麗な宮廷文化をさすのであろうか。ボヘミアの詩人リルケは、パリを憧れ、ロダンのもとで学ぶべくここを訪れたが、「パリは大きくて親めない都会だ、ただ楽しいのは夕暮の移りゆくセーヌ河畔のそぞろ歩きと、リュクサンブール公園の赤い花の色である」と。

2. ヴェルサイユ

パリの華かなりし18世紀の豪者を極めたブル

ボン王朝の人工美、粋を尽した王朝文化を想像するには、ヴェルサイユを訪れることだ、が今日の規模は昔日の $\frac{1}{10}$ であろうか、それでも復元された部屋々々、豪壮な庭園の構想と美しさを一見するだけでも当時の豪勢さを偲ぶことができる。宮殿の造営はルイ13世が狩猟用別亭の建造を始めたのが1623年、城館として大理石の内庭を囲む三つの翼からなる構想を基盤にルイ14世は大造築を行い、彫像を配備した大庭園、見事な数々の噴水と大運河の開削、南と北と二方面に広がる南北両翼の完成に向って宮殿礼拝場からオペラ劇場の開設を、ルイ16世の時代には御苑の大改造とアムール神殿、見晴らしの別亭、トリアノンには王妃の劇場をも開設、1785年には王妃の好む田舎家まで庭園に新設し着々と規模は拡大された。

当時の宮殿の総面積は2.473ヘクタール、現在は $\frac{1}{10}$ に縮小されたがそれでも814ヘクタール、宮殿に向う三条の大通りはルイ14世の像を中心に30度の角度で放射されているがその幅の広さは122.48m、94.86m、83.75mの三本からなる。宮殿前のアルム広場の面積8ヘクタール、48アール、この広場の面積はコンコルド広場と全く同じ面積からなる。正面に控える美しい内庭は2ヘクタール、48アール。宮殿内の室数は国王の居殿を除いて188室、アルム広場にあった大厩舎には2,400頭の馬と200台の馬車が置かれていた。(フランス学士院会・ヴェルサイユ・トリアノン博物館管理主事記録より)

内部は革命によって破壊され、見事な調度品、宝物、内装品は悉く略奪されたが、それらの内装品や器具宝物は逐次買収され、今では当時のままに復元できて、一般の人々に公開されているのは20数室程である。復元された部屋の名称を列挙すれば、鏡の回廊、礼拝堂、ヘラクレスの間、豊穰の間、ウレヌスの間、ディアナの間、マルスの間、メリクリウスの間、アポロンの間、戦争の間、閣議の間、王の寝殿、平和の間、王妃の寝殿、王妃の貴族サロン、大会食の間、王妃の衛兵の間、会議の回廊、午睡の間、王妃の居室、ルイ15世の寝殿、時計の間、王の内室、

女王の音楽サロン、ルイ16世の娯楽室、観劇場等が完全に復元された。尚この他にこの宮殿に附随した大小二つのトリアノン離宮は、一階建てではあるが、全館見事な大理石ばかりで、軽快に明るく、特に優雅な列柱の並ぶ内庭に面して建てられた回廊はその美しさで名高い。

広大な大庭園の中に色々な形をした数々の立派な噴水が相次いで姿を現わし、フランスの著名な河に模して造られた運河の流れと、その岸辺を飾るブロンズの多くの像は総て一流の作者による傑作揃いである。大自然の中で四季折々に風致を変える四季の泉水の美は言語に絶する。豪壮極まりないヴェルサイユの全景は唯々驚嘆するばかりである。

1919年6月の第一次世界大戦の終焉を告げるヴェルサイユ条約調印の間に用いられた鏡の回廊は、戦争の間と閣議の間の中間をつなぐ回廊で、王の寝殿と王妃の寝殿の間の通路でもある。それまでも大きな歴史的事件の場として革命後もここは度々用いられた。廊下は17の窓に夫々対応する17の鏡で飾られ、この窓は遠く地平線まで展望の広がる庭園と御苑とに面し、アーチ形の高窓であるが、窓と窓、回廊と回廊との間には24本の赤大理石の壁柱があり、上部には金箔青銅の柱頭がついて、上には王の紋章の太陽神が飾られている。天井画は石の玉座に座したルイ14世の親政の治績を称えるル・ブラン作の絵画セットからなっている。アポロンの間をはじめ、総ての部屋の天井と壁画とは何れも著名な宮廷画家の作による。宮殿の調度、絨緞、衣装、金銀細工の容器の豪奢さは目を見張らせるものばかりである。

宮殿を出ると見事な泉水苑につづいて周囲をとり巻くフランスを象徴する河川マルヌ川、セーヌ河、ガロンヌ河、ドルドニユ川、ロワール河を形どった運河と水の精の群像、児童群像、四季を象徴する女神群像で飾られている。芝生と森と白い運河のつづく、この一角の宮殿裏の大庭園だけでも面積を坪で表わせば30万坪からなる。絶対権力をほしいままにし、ヨーロッパ各国の宮廷生活の羨望の的であったヴェルサイ

ユは、1,000名の貴族と4,000名の侍女が出入し、夜は3,000本の大きなろうそくがこの400の鏡に照り映えたのである。宮廷がパリからヴェルサイユへ移されたのは、疲弊した社会の目と世論から遠ざかる為であった。逆にフランス大革命の怒濤は刻一刻とヴェルサイユ周辺に迫っていたのである。

フランス大革命に最大の影響を与えたのはジャン・ジャック・ルソーの思想である。彼の著書社会契約論は、カトリック教会とフランス王制の結合して主張した王権神授説を否定し、人民主権を説き、人間不平等起源論は私的所有や富の不平等を文明の所産として批判する。事実、革命の思想的源流は正にルソーにあったと見てよい。彼の故郷はスイスのレマン湖畔のルソー島（III C スイス 2 ジュネーブ篇）にあったが、幼少で父母と別れ、晩年はルーヴル宮殿の北に住んだ。今そこにはルソー通りが通じ、曾って墓の置かれたパンテオンの地下にはたい松を持って暗を照らしている手の浮彫が世に光明を投ずる象徴として置かれている。現在は1961年の生誕250年を記念し、遺体は再び自然にかえって郊外のエルムノンヴィルの池中の小島に移されている。ルイ14世時代の圧政が一番反抗の兆しの強い時であった、が強権がゆるめられた後継者16世の代に遂に爆発したのである。ルイ16世は温厚な君主ではあったが、政治上の才覚に欠け決断力に乏しかった。妻マリー・アントワネットに対しては色々と世の批判が行われていた。フランス革命の目標はその本質、自由・平等・博愛を求めることを理想とした。本来は絶対王制から立憲王制へと移行すべきであった。革命は次第に暴力に訴え血に飢えてテロ革命へと低下しては、自由・平等・博愛の精神は遂に実らず、三権分立の政治の理想も成らずして、革命はアナキー（無政府）へと堕し、フランスの秩序回復の為には天才的軍事戦略家の出現を待望するのみとなった。そこに現われたのが少壮の軍人ナポレオンであった。英雄ナポレオンの命運もまた短命である。

3. ソルボンヌ（パリ大学）

パリ大学は教師の組合から発生したギルド制自治団体の始まりであり、同じような形で学生の組合から発生したのがイタリアのボローニャ大学で、共に中世のヨーロッパ都市のギルド制度が教育研究機関に発生したもので、この二つの類型を原形としてヨーロッパの大学は成立してゆく。フランスとイギリスの大学は総てフランスのパリ大学を基礎とし、そこに備わる自治学生寮をカレッジ College と呼び、教会と国王、国家から特別の保護と特権とが与えられた。フランスのパリ大学と、イギリスのオックスフォード・ケンブリッジの両大学が揃って発達し、各国へ多大の影響を及ぼした。従ってヨーロッパでもっとも古くかつもっとも権威をもつものとして、パリ大学は12世紀にノートルダム寺院を聖堂としてそれをとり囲む形で創設せられ、13世紀初頭には早くもその重要性が尊重されて教皇と国王の認可を得、やがて国立総合のパリ大学としてヨーロッパ中世の学芸の中心となって栄える。ナポレオンは学制制度をしき、ここを中央集権的教育体制の頂点に置き、他大学の模範とされる組織を備えた。ソルボンヌ大学と呼ぶのは、ソルボンヌ司祭が神学校として建てたことに由来し、パリ大学の中で中枢となっていた文学人文科学部等を称する呼称である。法学部、医学部もこの地区にある。普通の大学と異り特定のキャンパスを設けず、ノートルダム聖堂を中心に全パリをキャンパスとする大構想で発足した。今日はナポレオン時代に定められた学部制度は廃止され、1968年には高等教育基本法が制定され、それからは校舎が地区別に分散して13の大学に分れ、178の「ユニテ」と呼ぶ教育研究単位に細分されて研究が行われている。中枢をなすソルボンヌの如きは19世紀に建てた建築物で、近代化した大都市の都塵の中に一般商社の建物とも混って一階は商館に使用されているものもあった。学生街には市民生活も雑居して共同生活をしている。この辺一帯をカルチュ・ラタンと呼び学生街として一般に親しまれている。大

学前のサンミッシェル大通りをへだてて美しいリュクサンブール公園が控え、学生の憩いの場となっているし、大学の直ぐ東南にはフランス国家に尽した偉人の墓パンテオンのドームがある。ここにはヴォルテール、ユーゴー、ゾラ、スーフロ、ラファイエット、ミラボー等が祀られている。ルソーの遺体も最近郊外のエルムノンヴィルに移されるまではここに祀られていた。パンテオンの後方には、パリの守護神サント・ジュヌヴィエーブをまつる教会があり、周辺一帯は文化的、宗教的に大学の町に相応しい空間環境である。ドイツのハイデルベルグ大学の如きも環境的には城塞という重要な国家機関と一緒に建てられて建築されている。ヨーロッパの大学には皆由緒深き人物像が銅像として飾られ歴史の深さを想はせる。ソルボンヌ大学の正面の玄関前には、18世紀の啓蒙思想の頂点にあり、社会学を創始したオーギュスト・コントの立像が立っている。コントはソルボンヌの卒業生であり、この教授となった人、その他、モンテーニュ、ヴィクトル・ユーゴー、パストウールの像がある。大学と社会とは本来一体化すべきもので、両者の結合は今後益々密接となってゆくであろう。大学と実社会、社会と学問の実践、社会環境の浄化等を考える時、実社会の建造物と境を接するヨーロッパの大学のもった意味を日本でも反省してみるべきではないか。大学生の生活と行動とは、社会を教化することによってその力を示すべきである。ヨーロッパの大学はその歴史と伝統を誇るものばかりで、日本の如く権威性の乏しいものは少ない。

4. UNESCO(国際連合教育・科学・文化機関)本部

第2次世界大戦後、新時代の画期的国際機関である国際連合の専門機関として、その教育面と科学文化面を担当するユネスコが、1946年11月4日にパリに創設された。19世紀の中葉から学者、教育家、科学者、芸術家、作家等の国際的協力や交流は盛んとなって現代への兆しは芽生えていたが、第1次世界大戦直後に国際連盟が創

始された際、その組織の中に知的協力国際委員会が成立し、知的協力事務局を設置して、国際協力事業に本格的に当ることになった。

当時は人類に極めて重要な教育に関する情報交換と、教育法の研究を目的とする独立の国際機関として国際教育事務局を先の知的協力事務局と並んでジュネーブに設置した。その後第2次世界大戦終焉と共に、戦争行為に対する強い反省と教訓から、戦争防止を主目的に国際民主主義に立脚し、平等な主権国家の連合体によって構成される国際間の新しい法秩序が二つの大戦への反省と教訓とに基づいて確立された。ここに国際連合が20世紀の理性と知能とを結集した広義の条約として成立することになったのである。幅広い総ての科学の領域を網羅して、平和と正義と生活向上の促進を旨とする雄大な世界機構が国際連合憲章のもとに成立したことは驚くべき時代的進歩であった。但しその内容には、精神的に更に充実した基本原則を必要とすることが判り、かつての国際聯盟当時に活動した知的協力と国際教育の両分野を総合した高度な専門機関を創設することになり、国際連合の中樞神経とも云うべき機関 UNESCO が国連専門機関として設立されることに決した。

ユネスコ憲章には冒頭に「戦争は人間の心の中に始まるものであるから、人間の心の中に平和のとりでを築かなければならない」と述べ、人間相互の風習と生活方式に関する無知が、疑惑と不信の原因となり、諸人民間の無知、偏見不一致がしばしば戦争の主原因となったので、人間の尊厳・平等・相互の尊重という民主主義の原理をば教育によって再認識させようと考えた。政府間の政治的経済的取り決めにのみ基く平和の体制は、永続的な支持を確保できる平和ではない。真の平和は人類の知的精神的連帯性の上に築くべきであると告げ、各国は国民に対し教育上充分でかつ平等の機会を与え、客観的真理が何等の拘束を受けることなく探求され、思想と知識の自由な交換を重視した。その方法は大量通信による知識伝達の方法を採用し、窮極の国際平和と共通の福祉世界を求めよと告げる。

ユネスコは20世紀の奇跡と云われた「人類の為の最善の行為への努力」を見事に成文化したのである。それは戦争の主たる原因を人間相互の精神的信頼感の欠如にありと指摘し、人間の知的情操の善意を信頼し排他闘争的本能の矛盾を克服させる道を教えた。人類の知的道徳的連帯意識のもとに、国連の目的である人種、性、言語、宗教の別を超越した自由と人間尊重の道を明示したのである。

第二次大戦で惨敗し国際的に孤立した日本にとっては、政府の力を乗り越えて、民間の力によってユネスコに連ることが唯一の許される日本再建の道であった。日本では民間に燎原の火の如くユネスコ運動は全国に広がって、日本再生の貴重な原動力となり得た。ユネスコ活動の原動力には、新時代の倫理的価値観、実践道徳の重要な側面が保持され、教育の分野は勿論、科学も文化もいずれも人生に至高の価値をもたらす無限の可能性を人間の人格的努力の中に秘めて、この活動は雄々しく展開された。その活動が生命的な社会実践の原理に立ち、教育愛と社会愛の啓発培養が顕著にうかがわれたこの運動も、組織の拡大に伴い、理想が高遠であればある程、その実現には困難が伴うのが常である。まして本体である国連自体が、幾多の国際的難問に直面しつつある時、その精神細胞であり頭脳であるユネスコは、今や激浪の中に難航しつつづけている。ユネスコが解体すれば国連自体も壊滅する。それは世界人類の生きる道の破壊に他ならぬ。ユネスコの本部パリの事務局の速かなる改革と前進とを切に祈念しつつ、人類の将来への遙かなる望みを託するものである。パリのユネスコ本部はエッフェル塔の東南、ナポレオンを祀るアンバリッドの西南キャンプロネ広場の横に珍しいY字型の特異な建造物でできている。周囲には林立した檣頭高くに全加盟国の国旗が翻り、文化の殿堂として壮観である。

5. 名所雑感

ノートルダム大聖堂——ルーヴル——凱旋

門——モンマルトル丘とサクレ・クール寺院 ノートルダム大聖堂

ノートルダムの名称は聖母マリアに捧げるの意味で、セーヌの右岸に面し1163年に起工、1345年に完成したカトリックの寺院である。パリの司教モーリス・ド・シュリが全私財を投じて実行に移した献身的な情熱の結晶である。螺旋階段387段からなるゴシック建築代表作で、パリの精神的支柱とされる聖堂である。正面は三層の門の扉から成り、中央扉はキリストによる最後の審判、左扉は聖母マリア像を主題とする彫刻群像で飾られている。その上段は横一列に並ぶイスラエルとユダヤ28王からなる諸王のギャラリー、更にその上部中層の中央にはパリの星と呼ばれる北のバラ窓（直径9.6m）のステンドグラスが燦然と輝く。最上には北に面して69mの四角い二本の塔が聳え、更に上には大きな鐘楼が立って15噸の重さの鐘が下がっているが地上からは殆ど望見できない。建物の中央の一番上層からは90mの高さの尖塔が空高く聳立し、特に聖堂の南側のセーヌの河岸からの眺望は一段と美しく陽に映える。ノートルダムは東西南北の何れの側面から見てもその壮麗さを競って夫々の趣を以て迫りくるものを感じず。堂内の収容人数は9,000名、何時訪れても満員で盛況の程がうかがわれる。

ルーヴル

ルーヴルは宮殿と美術館からなるセーヌ河右岸の豪壮な建造物からなり、外観は正に巧みな石の文化の感が深い。もとは王室美術館で所蔵品は略々30万点、世界に冠たる美術館である。ブルボン王朝、ナポレオン時代の陳列を含めて「古代ギリシヤ・ローマ」「古代エジプト」「オリエントの古美術品」「中世ルネサンス・近代彫刻」「絵とデッサン」等広大なギャラリーには6部門の多種多様な出品が所狭く陳列されている。彫刻では名高い何人の目にもつくミロのビーナス、サモトラケのニケの女神像、絵画ではダビンチのモナ・リザを始め殆どがヨーロッパ絵画の逸品で、時代は14世紀から18世紀までの泰西名画がずらりと並んでいる。広大なギャラリーは迷路

の如く複雑かつ多面で、総てを鑑賞することは短時日では不可能である。

凱旋門

エトワール広場の中央にナポレオンの命により1806年に着工してより、30年を要して1836年に完成したナポレオンの残した特異なパリの象徴である。高さは49.54m、横幅は44.82m、出征兵士の像やラ・マルセイエーズ等著名な浮彫が見事に外装を被う。下は無名戦士の墓で中央は愛国の祭壇となっている。周囲を包む石畳には赤と黒の星が夫々12個、合計24の星でとりかこまれ、赤い星を起点としてパリ全地区へと通ずる12本の街路が延びている。パリには数ヶ所の広場から夫々放射状に街路が通じている。世界の大都市でこの種の構想は余り見られない。エトワールとはこの広場の旧名で星の広場を意味する。現在の名称はシャルル・ド・ゴール広場が正しい。

モンマルトルの丘とサクレ・クール寺院

モンマルトルの丘はパリの北東部、丘の丘陵は名高い墓地である。丘の高さは約100m、小高い頂上には純白の美しいサクレ・クール寺院がコンコルド広場に向って建っている。革命によって血ぬられた広場に向い、国民の懺悔のしるしとして1919年より40年の歳月を費して建造されたパリを清め守護する寺院である。正面中央にはキリストの像が、その右にはジャンヌ・ダルク、左にはルイ聖王の騎馬像が、パリ中央に向って立っている。寺院の内部には、礼拝堂の上に立派なキリストの画像が飾られている。寺院まで行ったならば是非礼拝堂の内部とくに名画キリスト画像を見ることをすすめたい。モンマルトルの丘には、1871年のプロシア軍のパリ侵入に際しては、171門の大砲を運び上げ、プロシア軍を撃退して国を救った。モンマルトルの丘は常にパリを守護する象徴とされている。

モンマルトルの丘だけに見られる楽しい風景は、世界中から集った画家達の思い思いの作品が並べられ、パリを描いたあらゆる風景画が見事に小さな丘の一角を埋めつくしていることである。観光客の似顔絵描きで雑踏している細い通路を縫って、熱心に絵筆を運ぶ画家達の風貌

を眺めながら一巡することも、芸術家の街モンマルトルならではの風景であろう。価格も割に安価に相当の絵を気軽に分けてくれる。

6. パリの美術館・博物館

芸術・文化の殿堂としてのパリの真価は美術館の圧倒的に多いこととその内容の秀逸な点であろう。中にはおよそ古典的・静的なイメージとは正反対の近代的・動的で未来に向かって躍動的な内容の満ち溢れたポンピドウの美術・文化センター等のあることを挙げるべきであろう。ここへは年間平均700万人の訪問客があるという。古い文化と新しい文化の、過去と未来の、静と動との対照的な博物館として前述のルーヴルとポンピドウとを比較対照してみたい。冒頭に「古い歴史と新しい未来の両面を秘めたパリの風貌」と語ったのは正しくこうした事実を云うのである。

花の都パリの真の姿を示すものとしては、まぎれも無く、この都市の最大最高の特徴として絶対多数の卓越した美術館と博物館について記さなければならぬ。ここにはパリにあるあらゆる美術館・博物館を悉く列挙して紹介してみよう。但し、筆者が直接鑑賞したものはその一部にすぎない。

〔美術館〕 ルーヴル、オルセ、オランジュリー、国立ジョルジュ・ポンピドウ美術文化センター、装飾、ピカソ、クリュニー、パリ市立近代、ジャクマルアンドレ、コニャック・ジェ、ニッシム・ド・カモンド、チエルヌスキ、ドラクロワ、モロー、ゴブラン・セーブル陶器、アフリカ・オセアニア、グランバレ、ブールデル、ロダン、プティ・パレ、ギメ、モルマッタン、ラ・ビレット、総合ミュージアム等、以上は悉く美術館で上記の名称にはそれぞれ美術館の名称が付けられているが省いた。

尚、従来ルーヴルに続いて名高く多くの人々に愛された印象派美術館ジュ・ド・ボムはコンコルド広場とチュイルリー庭園の間にあって非常に世の関心が高かったが、何故か最近は閉鎖されたまゝになっている。セーヌの岸を渡った対岸にある昔パリ万博で活躍したガラス張り

のオルセ駅を改装したオルセ美術館は革命的美術館であるばかりでなく、世間から注目されている19世紀の著名な作品が多い。古代ローマ時代のものは、これを求めたければクリュニー美術館にある。

〔博物館〕 人類、海洋、発明・発見、自然史、産業技術、バルザック、ユーゴー、カルナヴァレ、フランス遺跡、軍事、オペラ座、郵便、民族・民芸、狩猟、パノラマ模型、以上の各名称にも皆博物館の名称が付いている。パリの美術館・博物館は、求める時代や目的によって内容が異った形で幅ひろく豊富に展示されている。中には個人コレクションによるもの、或いはロダン、モロー、ピカソ、ゾラ、等の作品遺物を集中している故人を偲ぶものもある。イギリスのロンドンにも多くの博物館・美術館があるが、パリの方が美術館ははるかに多いであろう。花の都パリの真の姿はこれらの美術の中に求めるべきであろう。

尚、美術館全般に既に驚くべき大革命が起りつつあり、ルーヴルも実は今大改装が進められ、中庭にはガラスの大ピラミッドを建築する工事が着手されている。ピラミッド建設と併行して、あらゆる改造計画が極めて大規模に進められ、強化特殊ガラスを使用した最先端テクノロジーによる建築大革命が始まったのである。フランス人は恐るべき能力と感覚をもち、常に世界にさきがけて斬新な思想を展開する。かつて旧体制を打破したフランス大革命は、今や新しい世紀に向う新文化大革命として、通俗の懐古趣味的文化探求を勇敢にふり捨て、芸術と歴史と科学とを連携させ、古典と現代と未来の総合を計り、未来学へと挑むリズムカルな活力が燃え上っている。今パリは華々しく蘇生しつつある。芸術・文化の真髄に向って。

超近代的構想であらゆる文化像にとり組んだポンピドウ美術文化センターの出現を皮切りに、ルーヴルも競ってガラスのピラミッド造りに向い、また鉄骨と平面ガラスの巨大な駅の空間を美術館に大改造したオルセ美術館の誕生の如き、皆時代の変化をより速かに把握し、雄渾無比の

構想を以って未来に挑戦するフランス人の精神と情熱とによるものとして心からの敬意を表したい。18世紀のパリの生命は21世紀に再び華々しく甦るであろう。既に脱工業化時代の先端を切ったパリの将来に期待する。

7. ロワール河流域と古城群

オーベル山地に源を発し全長 1,020 km フランス第一の大河として大西洋に注ぐロワール河流域は、風光明媚の景勝の地でフランスの芸術文化を育んだ源流をなすところ、河の本流支流一帯に38にも及ぶ優美で堅固な国王達の居城がつづく。何れの城も側面をロワール溪流の要塞で囲まれ、中世からルネサンス頃までのフランスの歴史の舞台となったところである。第Ⅲ巻の中世ドイツの封建諸侯の城塞とは趣を異にし、統一国家フランス王朝の代々の国王の居城であり、別荘を目標に改造されて優美な姿をした美しい城館として名高い。対外的には英仏両王家の宿命的な戦い100年戦争、救国の聖女ジャンヌ・ダルクの奮戦の場となったが、亡国の危機に陥ったフランスではむしろ国内の分裂抗争、王朝内部の王位継承をめぐる権謀術数の暗い葛藤の影を宿す城が多い。又新旧両教派の烈しい闘争の原因ともなった城もある。城塞ではなく居城として城主の趣好に合わせ色々の趣を凝らした美しい古城群がつづく。

ブロア城

ロワール河を眼下に見下す岩の台地に聳え、代々の王達の城館として多くの事件に関係深い居城で、救国の聖女ジャンヌ・ダルクが神のお告げの靈感をうけ「フランスの敵と戦って皇太子を王位に就けよ」と啓示されて兵を結集し、初陣の出撃を行った城もこのブロア城である。1429年4月26日、これより僅か4ヶ月で皇太子はシャルル七世として王位に就く、ジャンヌ・ダルクが最初皇太子に面接説得した城はシノン城であったが、兵を結集出陣したのはブロア城である。フランス軍の反攻によりイギリス側の砦は次々に陥落、トゥーレルの戦、オルレアン

の救援、パティ戦の大勝、ランスの戦闘、最後に城市コンピエーニュの救援ならずして捕えられ、終にルーアンの火刑台で空しく消えた。19才であった。この附近の諸城一帯にはジャンヌを記念する数々の遺跡が万人の胸をうつ。

ブロア城に入れば正面の扉の前にルイ12世騎馬像のあるルイ12世翼館（エール）が見事で、中にある中庭には13世紀～17世紀にかけての異った様式の四種の城館が並ぶ。かつてここは中世の要塞として重視されたが、近世の武器と戦術の進歩に伴い、かつてはフランスの王権確立により対外戦闘は不要となって大改造が施され、城館に変わった。他の殆どの城の構造も同じような変遷をとげる。建築様式もゴシックからルネサンス様式へと移る過渡期のものが主で此の館の中は重要な芸術作品、彫刻、絵画等のコレクションで充満していた。いわばフランス芸術の歴史的陳列場と云った形で館は装備されたが、現在は何も残っていない。革命の際に皆略奪されている。

アンボワーズ城

この城の起源は遠いローマ時代からロワール河畔の橋の横に砦があったのが始まりである。今はロワール河を見下す高台の上に中世期には城塞として、近世に入っては城館へと改装された代表的建築物で小さい尖塔をつらねた王の館として改造されたが、今なお中世の堅固な城壁も一部にはそのまゝ残っている。小さい尖塔を連ねた王の館としてフランス・ルネサンスの最盛期には国王フランソワ一世のもとへ多くの芸術家、文人も訪れたロワール河畔では、城館としての代表的な最大規模のものに改造されたが、後に戦乱の為殆ど消失し現在残っているのはユールトル塔と聖ユベール礼拝堂と王の館だけである。建築様式はイタリア・ルネサンスとフランス中世との結合した代表的存在と云われる。城主フランソワ一世はレオナルド・ダ・ビンチを城へ招いて美術・芸術を尊重した。ダ・ビンチの晩年はここで活躍し永眠して遺骸は城の礼拝堂に葬られたが、後の宗教戦争で破壊された。

この城には暗い陰影がつきまとう、第二代フ

ランソワ2世の頃、新教徒達によるクーデターが計画されたが、新教徒軍の陰謀が露見し新教徒全員が極刑を受け虐殺されるという惨事を極めたところ、この事件がフランスに於ける宗教改革の発端となるのである。

シュノンソー城

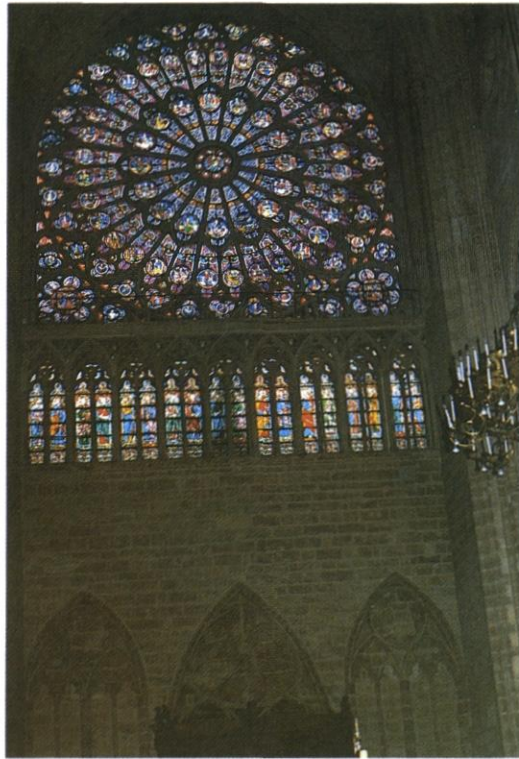
ここはロワール河流域の古城群の中でも最も美しい城であろう。造営されたのは1515年～1522年のころである。ロワール河支流のシエール川を跨いで橋上の城とうたわれたが、川面にぽっかりと浮かぶが如く、周囲は深い森で包まれている。門から入り美しい広大な庭園に至る長い道は、プラタナス並木のトンネルとなって落ち着いた静な雰囲気をかもし出している。広い庭園の入口には円型をなしたマルク塔が人目をひく。

この城は広大で見事な幾何学的模様をなした花壇で飾られた二つの庭園、その一つはカトリヌ・ド・メディシスの庭、他はディアーヌ・ド・ボワチエの庭と呼ばれる庭園で、周囲は林でとりかこまれ、又庭の中へシエール川の水をとり入れてたゞえた水の庭も出来、庭園芸術として色彩が濃かだまことに美しい。城内には、ゴブラン織り、絵画、家具、装飾品で一段とひきたち、それらの品々を飾る城館はイタリア式装飾の施された石造りである。中には豪華な宴会場を控え、当時の文人、芸術家、社交会の人

々の交流の場として栄え、ルソー、ヴォルテール、マリヴォー等好んで集会したと云われる。橋の一つに中世期の戦闘用の跳ね橋等も残っているが、他の城に見られるような謀略の繰り返えされた暗い印象の無い、明るく楽しい城である。別名を六人の奥方の城と呼び、フランス大革命の当時も、城主デュパン夫人が領内に善政をしいて、農民達に敬愛されていた為にこの城だけは略奪を免れて、館内の家具装飾品は今日も完全に保存されているという。城主と領民との信頼関係の重要さを充分考えさせられた。城の持主は其後色々の人に転々と売られて変わったが歴史に残る心のなごむ華麗な城館である。

この他、ロワールの峡谷にはアゼ・ル・リドー、ピランドリー、ユセ、シヤンボール、シユベルニー、ショーモン、ランジエ、サッシエ等々総計38程の古城群が一面に展開していて何れも背面を溪谷で護り、多くは横に橋をひかえ、広大な闊葉樹林に囲まれ、見渡す限りの獵場が至る所に望まれる。居城となった多くの城は、長い並木路を正面の門に至る通路として自然の景観の中に優雅な容姿のまゝ中世～近世に至るヨーロッパの面影を残している。総ては人間の歴史を物語る栄枯盛衰の姿であろうか。

1987・10・1

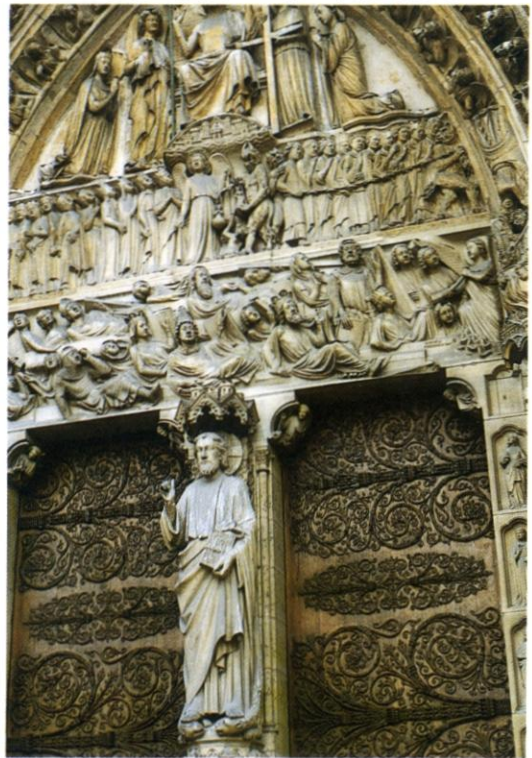


◀ ノートルダム大聖堂入口の北のバラ窓、パリの星と呼ばれる最も美しいもの、直径9.6m

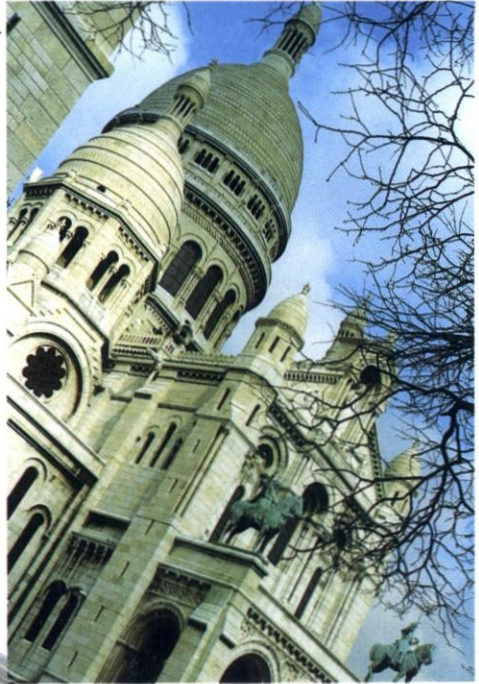
ノートルダム大聖堂の正面玄関東の扉、中央のキリスト像に並んでその東側にある。ノートルダムは聖母マリアを祀る寺院、一般参詣者はここから入る



ノートルダム大聖堂の正面玄関中央の扉、キリストの最後の審判、この扉は平素は開かない
▼



サクレクール寺院はモンマルトル丘に高く、▶
コンコールド広場に向って、革命に流された
血を清めるために建立された。正面中央の高
くにキリスト、その下段左にジャンヌ・ダル
ク、右にルイ聖王の騎馬像が立つ、ローマ・
ビザンチン様式



◀エトワール広場の凱旋門の上三段
と彫刻、出征兵士の像ラ・マルセイ
ーズは特に名高い

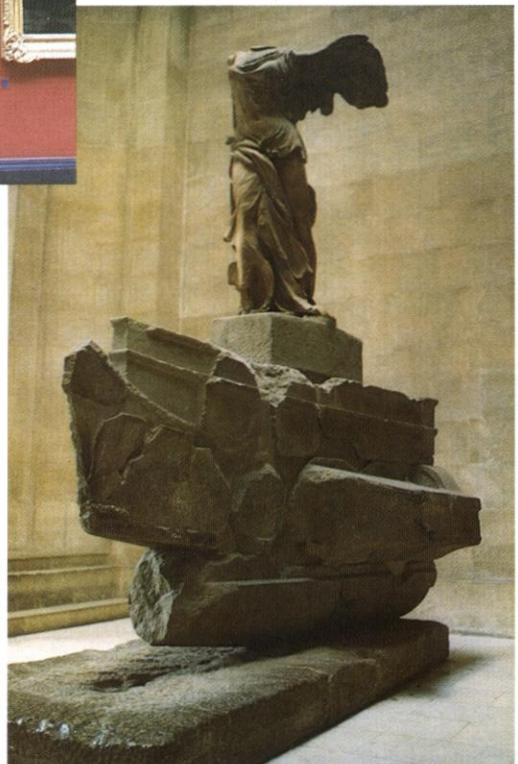
エトワールの凱旋門東南より撮す。▶
周囲の石だたみに赤と黒各12の星
の印あり、赤星の先端から12本の
道路が放射状に出ている



ギリシア神殿欄の彫刻▶
ルーヴル美術館

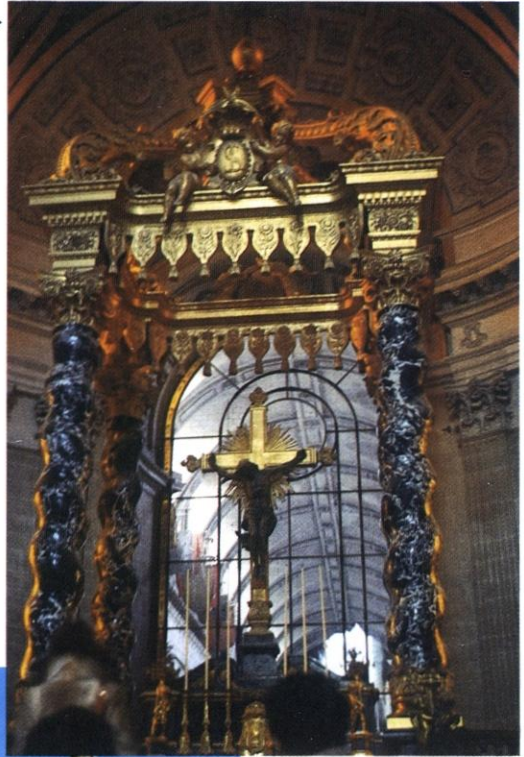


◀ドラクロア作の自由の女神、自由・博愛・平等を象徴する三色旗を高く掲げる
ルーヴル美術館



▶サモトラケのニケ、軍船の舳先に立つ勝利の女神
ルーヴル美術館

地下にナポレオンの墓
のあるアンバリッドの
国王の礼拝堂、中央に
は十字架上のキリスト
像がある



◀UNESCO本部の外観

ブロア城西南の角▶

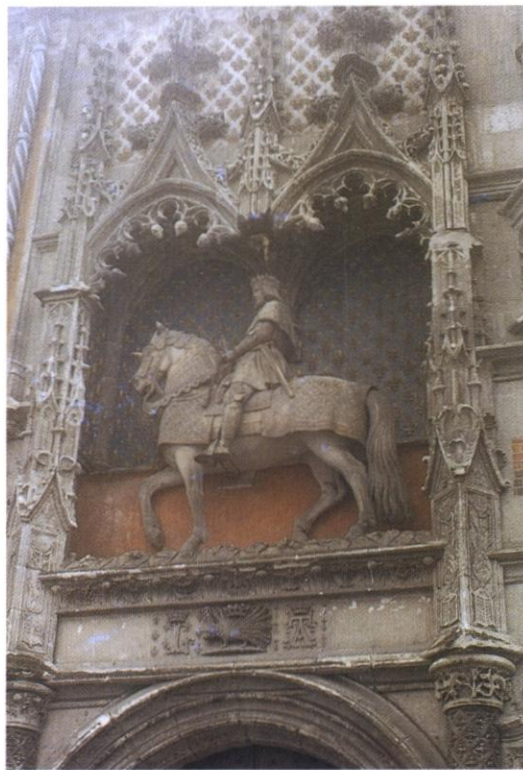




▲
フランソワ一世の翼の煖炉 プロワ城

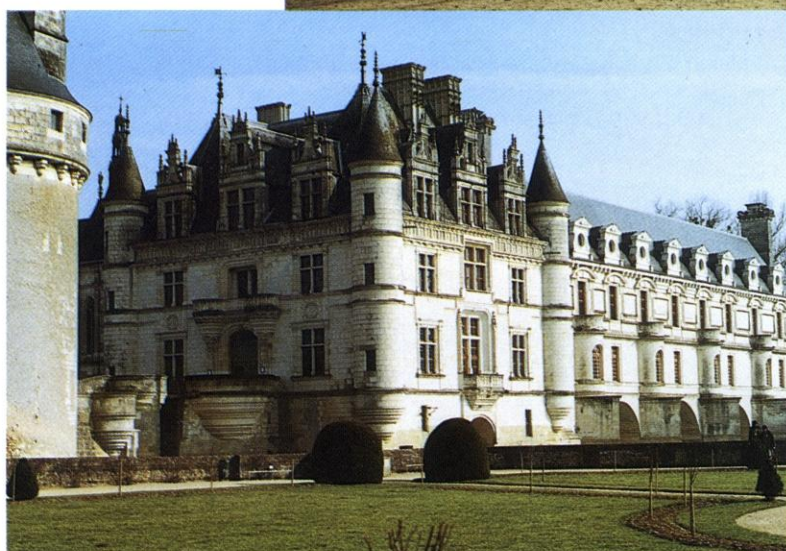


▲
アンボワーズ城の城門につづく並
木路と入口の門の扉



▲
ルイ12世騎馬像 プロワ城、館の入口

アンボワーズ城の門と太い円塔を中心に小尖塔をつらねた王の館、裏側はロワール河を見下す岩山の要害である



◀ シュノンソー城とカトリヌ・ド・メディシスの美しい庭園

シュノンソー城はロワールの支流シエール川に跨って対岸まで橋館がのびている。水上に浮ぶ城とよぶ

